

長倉 保先生の定年退職記念号に寄せて

——より豊かな新しい人生を——

清水 嘉治

長倉先生、お元気ですか。

先生は二年前、お病気で定年一年前に退職されましたとき、先生が「いい大学にして下さい」といわれたことを思い出します。

いま心もとない学部長という仕事柄、先生の退職記念号に一文を書く立場になりました。先生と直接対話したのは、わたくしが一九八三年四月に本学に就任した年の五月の経済学会主催の歓迎会のときだったと思います。偶然に先生の隣りに坐わりまして、先生が旧制水戸高校の話をしたときでした。「清水さんは、茨城県の鉾田町生まれですね。わたくしの水戸高時代の根本君は、多分、清水さんの中学の先輩でしょう」といわれまして、親近感を感じました。それから先生は、戦時下の旧制高校生の生活が次第に軍国主義の風潮にまきこまれたことを事実に基づいて話していました。そのとき話し方は、実に温厚で、ひとことひとことを噛みしめるような話し方でした。このことが印象的でした。

先生は、大正一二年に静岡県伊豆に生まれ、昭和一八年水戸高校に入学し、太平洋戦争下で、厳しい高校生活を送られ、敗戦後の昭和二三年三月に水戸高校を卒業し、同、二四年に東京大学文学部国史学科に入学し、日本近世史を

専攻され、同、二七年に卒業されました。その後神戸大学で約十二年間、近世日本経済史の研究を続け、昭和三九年一〇月に本学経済学部にて助教授として就任され、同四二年四月に教授となり、その後、学部長、学長代行、理事長などの激職を経験されました。とくに昭和四七年一月から同四九年九月まで理事長を務めましたときは、大学紛争の嵐の中で、大学改革、理事会改革に没頭され、厳しい大学作りには直面したようであります。

先生は理事長時代のことを一言も語りませんでした。先生は一貫して、大学自治、研究の自由、大学の下からの民主化のことを主張していましたことを、当時の経済学部の教授からきいていました。本学のシュトゥルム・ウント・ドラングの中で、先生は冷静な頭脳と温い心で、大学改革に没頭していたことを想い出します。

先生は、研究業績の面でも、実に着実な研究成果をものにしてきました。それは本号の末尾の著作目録が証明しています。専門外のわたくしにはとてもコメントはできません。ただ共通している点は、先生が日本の各地の地方史、村落史の調査研究を地道に続け、地域史の中での生産、所有諸関係をめぐる人間の生き方、あり方を探求されていることに共感を覚えました。地域主義の経済史の根元の実像を地道に分析している点に改めて学ばされました。

多分、先生は、昭和五二年四月一日の『神奈川通信』（二二二号）を覚えておられるでしょうか。わたくしは同誌の「私の研究」欄で、先生の当時の研究関心を知り、地道な探求心に学ばされました。

先生は栃木県宇都宮市からおよそ南へ一五キロのところにある旧下蒲生村（現上三川町下蒲生）で代々庄屋を勤めた旧家の田村仁左衛門が二つの著作をものにしたことを紹介しています。その二つの著作は、『農業自得』と『農家肝用記』（いずれも天保二二（一八四二）年稿本完成）であり、農業の本来あるべきすがたを論じたものであり、前書は、古島敏雄教授や飯沼二郎教授が紹介し、古島教授は、前書を「自主的な農学胎生の萌芽」に求め、飯沼教授は、「欧米を典型とする農業の近代化路線を厳しく批判する立場から、老農体験による農書を全面的に評価する」立場にあることを

紹介し、先生は早くから、『農業自得』と『農家肝用記』を総合的に評価すべきであると主張されていました。先生は、『農業自得』による収穫量の確保とこの『農家肝用記』による収益性の検討の必要性を強調したのであります。『農家肝用記』を要約すると、米・大小麦・大豆・粟・稗・甘藷・ごま・木綿・煙草について、反当りの作業行程別の投入量と一日一三二文(米にして二升四合)の労賃積算の基礎を明らかにし、所要人馬の労賃、飯料、種子・肥料代を生産費としてこれに年貢相当分を加えて計上し、その収支の「過不足」をあきらかにしていることにあります。わたくしは、田村仁左衛門は、農業の貨幣経済学の構想を一八四二年にすでにまとめていたのではないかと思われまます。

先生の田村仁左衛門という一老農の著作の総合評価を知り、学ばされるばかりでした。仁左衛門が「農学さかえて、農業ほろぶ」という名言を紹介されました点にも興味をもちました。

いま日本の農業の様変わりの中で、先生の研究された仁左衛門の農業哲学と実学をふまえて、日本の農業の本質を知覚すべきではないかとわたくしは思います。

わたくしは、先生の「研究」の関心に魅せられました。わたくしは、現代の世界経済の激動の中で、小さな地域における市民の逞しい自治能力を評価しつつ、新しい地域研究に関心をもっています。

最後になりましたが、長倉先生、どうか健康に留意しまして、研究に対する無限のエネルギーを静かに燃やし、より豊かな新しい人生を送って下さい。

本学のために、研究のために、全力を尽くされましたことに、経済学部を代表してお礼を申し上げたいと思います。本当にご苦勞様でした。

一九九四年七月十九日

経済学部長 清水 嘉治